

津

端

亨

編纂

現代短歌分類辭典

新裝判
37卷

津
端
亨
編纂

現代短歌分類辞典

新装判
37卷

現代短歌分類辞典

新装版 37 卷

通卷 195

平成六年四月十日発行

定価一六、七〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 亨

発行所

現代短歌分類辞典刊行所

代表 津 端 亨

〒345

埼玉県北葛飾郡杉戸町宮前一九六一五

電話(〇四八〇)三八一〇〇四〇番

振替 東京三十一九三一一四

(ISBN 4-87706-195-9)

次

目次

目次	歌数	頁数	歌数	頁数	歌数	頁数
とも	五四七	一	ともす〔灯す・点す〕	一八八	四九	七
とも〔鱸〕	三三	一六	ともすり	二	五五	一
とも〔伴〕	八〇	一六	ともすれば	一一三	五五	一
ども〔雖〕	二	一九	ともだち〔友達〕	七六	五八	二
ともあれ	二〇	一九	ともづな〔續〕	一〇	六一	一
ともえ〔巴・鞆絵〕	四	一九	ともどち〔友どち〕	三三	六一	二
ともえり〔共襟〕	一	二〇	ともども〔共共〕	一一	六二	一三
ともかき〔友垣〕	九	二〇	ともどもに〔共共に〕	三三	六三	一
ともかく〔兎も角〕	八	二〇	ともなふ〔伴う〕	五〇	六三	二
ともかくも〔兎も角も〕	四二	二〇	ともなく	一一一	六五	二
ともかせぎ〔共稼ぎ〕	二	二二	ともに〔共に〕〔とともに〕	四四二	七一	五
ともがら〔輩〕〔とも〕	五七	二二	ともね〔共寝〕	三	八四	一六
ともくずれ〔友崩〕	一	二四	ともびと〔供人〕	一	八四	二七
ともしき〔羨しき〕	一二四	二四	ともぶね〔友船〕	四	八四	二〇
ともしき〔羨しき〕	一	二七	どもり〔吃り〕	一五	八四	二〇
ともしげ〔乏しげ〕	一	二七	ともる〔灯る・点る〕	二四八	八四	一
ともしさ〔乏しさ〕	一	二七	どもる〔吃る〕	四	九一	四
ともしさ〔羨しさ〕	五四	二七	とや〔鳥屋〕	三四	九二	一一
ともしば〔乏葉〕	一	二九	とや	一	九三	一八
ともしび〔灯火〕	六四〇	二九	とや〔鶏舎〕	三四	九三	一三
ともしむ〔羨しむ〕	一	四八	とやか〔外山〕	六	九四	一
ともしも〔羨しも〕	一九	四八	とやま〔外山〕	三三	九四	五
ともしら〔乏しら〕	四〇	四八	とやま〔富山〕	一八	九五	一五

とよさか〔豊栄〕	五二〇四	とらのこ〔虎の子〕	三二二三	とりいれ〔取り入れ〕	二五一八九
とよさかのぼる〔豊栄のぼる〕	一〇二〇四	とらのを〔虎尾草〕	七二二三	とりいれる〔取り入れる〕	一一九〇
とよとみ〔豊臣〕	一一〇四	とらびすていぬ〔トラピステイヌ〕	一一二三	とりえ〔取り柄〕	六一九〇
とよはし〔豊橋〕	一一〇四	とらびすと〔トラピスト〕	一一二三	とりえすと	二一九一
とよはたぐも〔豊旗雲〕	九一〇四	とらふ〔虎斑〕	四二二四	とりおき〔取り置き〕	三一九一
とよべつと〔トヨベツト〕	二二〇五	とらふぐ〔虎河豚〕	一一二四	とりおとす〔取り落とす〕	二一九一
とよみ〔響み〕	六八一〇五	とらぶる〔トラブル〕	一一二四	とりがい〔鳥貝〕	一一九一
とよみき〔豊酒〕	九一〇七	とらほーむ〔トラホーム〕	一一二四	とりがい〔鳥飼〕	三一九一
とよむ〔響む〕	五三二〇七	とらま〔ドラマ〕	一一二四	とりかえす〔取り返す〕	六一九一
とよめき〔響めき〕	三四二〇八	とらむ〔ドラム〕	三二二五	とりかえる〔取り替える〕	一一九一
とよむ	二二〇九	とらむかん〔ドラム缶〕	一四二二五	とりかかる〔取り懸かる・取り掛かる〕	一一九一
とよめく〔響めく〕	一九二二〇	とらわれる〔捕らわれる・囚われる〕	五一二二五	とりかご〔鳥籠〕	三六一九二
とよもす〔響もす〕	三三二二〇	とらんく〔トランク〕	二〇二二七	とりかこむ〔取り囲む〕	一〇一九三
とら〔虎〕	二四二二一	とらんじすたあ〔トランジスタ〕	二二二八	とりがなく〔鶏鳥〕	一一九三
とら〔寅〕	四二二二	とらんす	六二二八	とりかぶと〔鳥兜・鳥頭〕	二二一九三
とら〔銅鑼〕	一四二二二	とらんぷ	一四二二八	とりかわす〔取り交わす〕	四一九四
とらい〔渡来〕	九二二三	とらんべつと	二二二八	とりきけむ〔取著〕	一一九四
どらいぶ〔ドライブ〕	七二二三	とり〔酉〕	六二二九	とりくみ〔取り組み〕	二一九四
どらいぶうえい〔ドライブウエ〕	二二二三	とり〔鳥〕	二二〇二二九	とりこむ〔取り込む〕	二一九四
とらくたあ〔トラクタ〕	九二二三	どりあん〔ドリアン〕	三二八五	とりこや〔鳥小屋〕	七一九四
とらざめ〔虎鮫〕	一一二四	とりあつち〔トリアッチ〕	一一八五	とりこわし〔取り壊し〕	一一九五
とらす〔取らす〕	二三二二四	とりい〔鳥居〕	一二四二八五	とりさし〔鳥刺し〕	一一九五
どらせな〔ドラセナ〕	二二二四	とりいず〔取り出す〕	二二八九	とりざた〔取り沙汰〕	一一九五
とらつく〔トラック〕	二七三二四	とりいそぐ〔取り急ぐ〕	一一八九	とりじごく〔鳥地獄〕	一一九五
とらつぐみ〔トラグミ〕	一一二二	とりいだす〔取り出だす〕	一六一八九	とりしま〔鳥島〕	二一九五
とらねこ〔虎猫〕	三二二三	とりいとうげ〔鳥居峠〕	二二八九	とりしまりやく〔取締役〕	一一九五

とりすぎる〔取り緋る〕	六一九五	とりひきじょ〔取引所〕	一二〇八	どれい〔奴隸〕	七二六
とりすます〔取り澄ます〕	一一九五	とりぶえ〔鳥笛〕	四二〇八	どれす〔ドレス〕	五二二六
とりだす〔取り出す〕	一四一九六	とりべやま〔鳥辺山・鳥部山〕	八二〇八	どれすでん〔ドレスデン〕	二二二六
とりたて〔取り立て〕	五一九六	とりまく〔取り巻く〕	二三二〇八	とれたて〔取れ立て〕	一二二六
とりちらす〔取り散らす〕	二一九六	とりみだす〔取り乱す〕	一二〇九	とれつ〔堵列〕	四二二七
とりつぎ〔取り次ぎ〕	一一九六	とりもつ〔取り持つ〕	二二〇九	とれど〔トレド〕	一一二七
とりつく〔取り付く〕	六一九六	とりもどす〔取り戻す〕	一二〇九	どれどれ〔何れ何れ〕	一一二七
とりつけ〔取り付け〕	二一九七	とりや〔鳥屋〕	一六二〇九	とれび〔トレビイ〕	一二二七
とりで〔砦〕	五一一九七	とりやめ〔取り止め〕	四二二〇	どれほど〔何れ程〕	八二二七
とりで〔取手〕	二一九八	どりゅう〔土竜〕	一六二二〇	とれもろ〔トレモロ〕	一一二七
とりどころ〔取り所〕	三一九八	とりょう〔塗料〕	二四二二〇	とれんち〔トレンチ〕	二二二八
とりとま〔トリトマ〕	五一九九	どりよく〔努力〕	一八二二一	とろ	三二二八
とりとめ〔取り留め〕	一三一九九	とりよせる〔鳥寄せる〕	二二二二	とろ〔滯〕	五五二二九
とりとまらず〔鳥止らず〕	一一〇三	とりよろう〔取り具ろふ〕	四八二二二	とろ〔吐露〕	二二二〇
とりどり〔取り取り〕	一二八二〇三	どりのる〔ドリル〕	七二二三	どろ〔泥〕	四二五二二〇
とりなおす〔取り直す〕	二二〇六	とりわけて	一五二二三	どろ〔白楊〕	一一四二
とりなす〔取り成す〕	三二〇七	とる〔取る〕	一八五二二四	どろあし〔泥足〕	一五二四二
とりにく〔鳥肉〕	一一〇七	とる〔捕る〕	四九二二九	とろいか〔トロイカ〕	二二四二
とりのこす〔取り残す〕	二二〇七	とる〔採る〕	八一二二〇	とろいせき〔登呂遺跡〕	一一四二
とりのぞく〔取り除く〕	一一〇七	とる〔執る〕	三九二二三	とろいで〔トロイデ〕	一一四三
とりのぼせる〔取逆上〕	一一〇七	とる〔撮る〕	二三二二四	とろう〔徒勞〕	一〇二四三
とりはずす〔取り外す〕	一一〇七	どるい〔土塁〕	六二二四	どろうみ〔泥海〕	八二四三
とりはだ〔鳥肌・鳥膚〕	三二〇七	とるうまん〔トルーマン〕	二二二五	とろうる〔トロール〕	一一四三
とりばはぜのき	一一〇七	とるこぼう〔トルコ帽〕	二二二五	どろえ〔泥絵〕	一一四三
とりはらう〔取り払う〕	二二〇八	とるすとい〔トルストイ〕	一六二二五	とろける〔盪ける・蕩ける〕	二二四三
とりひき〔取り引き〕	一一〇八	どれい〔土鈴〕	一三二二六	どろじあい〔泥仕合〕	一一四四

とろっこ	二七二四四	とわーず〔問わず〕	一二五四	とんそう〔遁走〕	五二六五
とろとろ	五五二四四	どわすれ〔度忘れ〕	二二五四	どんぞこ〔どん底〕	一六二六六
どろどろ	一八二四六	とわだ〔十和田〕	三〇二五四	どんたく	六二六六
どろぬま〔泥沼〕	一〇二四七	とわだこ〔十和田湖〕	八二五五	どんちよう〔緞帳〕	四二六六
どろのき〔白楊〕	三八二四七	とわに〔永久に〕	一六九二五五	どんつう〔鈍痛〕	三二六七
とろび〔とろ火〕	二二四八	とわたる〔疾渡〕	一二六〇	とんでもない〔とんでもない〕	一二六七
どろばう〔泥棒〕	一〇二四九	とを〔とを〕	一二六〇	どんてん〔曇天〕	七二二六七
とろみ〔盪〕	一二四九	とをを	一二六〇	とんでんへい〔屯田兵〕	二二六九
どろみず〔泥水〕	一九二四九	とおおとおおに	二二六〇	とんと	二二六九
どろみち〔泥道〕	六二四九	とん〔屯〕	一五二六〇	とんど〔爆竹〕	一二六九
とろむ〔盪む〕	二二五〇	とんえい〔屯営〕	一二六一	どんとう〔鈍刀〕	三二六九
とろむ〔澹む〕〔盪む〕	一七二五〇	とんかつ〔豚カツ〕	三二六一	とんとん	五二六九
どろやなぎ〔泥柳〕	一二五〇	とんがる〔尖る〕	三二六一	どんどんと	二二六九
どろよけ〔泥除け〕	一二五〇	どんかん〔鈍感〕	二二六二	どんな	三〇二七〇
とろり〔トロリー〕	一二五〇	どんき〔鈍器〕	一二六二	とんにく〔豚肉〕	二二七一
とろりと〔盪りと〕	三五二五一	どんきホーテ	四二六二	とんねる〔トンネル〕	七八二七一
どろりと	五二五二	とんきよう〔頓狂〕	三二六二	どんふあん〔ドンファン〕	一二七三
とろろ〔薯蕷〕	二〇二五二	どんぐり〔団栗〕	二七二六三	どんぶり〔丼〕	九二七三
とろろじる〔とろろ汁〕	九二五二	どんこん〔鈍根〕	一二六四	とんぼ〔蜻蛉〕	五八七二七四
とろろあおい〔黄葵〕	六二五三	どんさい〔鈍才〕	一二六四	とんぼがえり〔蜻蛉返り〕	四二九〇
とろろいも〔薯蕷蔗〕	一二五三	とんし〔頓死〕	一二六四	とんぼつり〔蜻蛉釣り〕	一二九〇
とろん	二二五三	どんじゅう〔鈍重〕	一〇二六四	とんや〔問屋〕	七二九〇
どろん	二二五三	とんしょ〔屯所〕	二二六四	とんやがい〔問屋街〕	五二九〇
どろんこ〔泥んこ〕	四二五三	とんす〔屯す〕〔たむろす〕	二八二六四	どんよく〔貪欲〕	二二九〇
とろんと	二二五三	どんす〔緞子〕	三二六五	どんより〔貪欲〕	七二九一
どろんと	二二五四	とんせい〔遁世〕	二二六五	どんより	二八二九一

どらん「食婪」	四二九二	ないしんのう「内親王」	三三五四	なえぎ「苗木」	四六三六六
な「名」	一四六〇二九二	ないせん「内戦」	三三五四	なえどこ「苗床」	一七三六七
な「汝」	二二三四	ないぞう「内臓」	八三五四	なへば「苗場」	九三六八
な「菜」	四三五三三四	ないそぎそ	一三五四	なえる「萎える」	二三八八
なあす「ナース」	一三四六	ないち「内地」	一五三五四	なお「猶・尚」	二四二一三六八
ない「無い」	三三四六	ないてい「内定」	一三五五	なおえつ「直江津」	七四三六
ないいぶ「ナイーブ」	一三四六	ないてい「内庭」	一九三五五	なおかつ「尚且つ」	一四三七
ないえん「内苑」	三三四六	ないとくらぶ「ナイトクラブ」	二三五五	なおさら「尚更」	二四三七
ないえん「内縁」	一三四六	ないねん「内燃」	一三五六	なおさり「等閑」	三六四三七
ないおう「内応」	一三四七	ないふ「ナイフ」	一九三五六	なおす「直す」	三二四三八
ないおう「内奥」	一三四七	ないぶ「内部」	三七三五六	なおす「治す」	一四三九
ないか「内科」	三三四七	ないへき「内壁」	一三五七	なおなお「猶猶・尚尚」	一一四三九
ないかい「内海」	五九三四七	ないへん「内辺」	一三五七	なおも「猶も・尚も」	一二四三九
ないがい「内外」	七〇三四八	ないほう「内報」	一三五七	なおる「直る」	一二四四六
ないかく「内閣」	二三三三〇	ないみつ「内密」	一三五八	なおる「治る」	一四四六
ないがしろ「蔑ろ」	五三五一	ないむだいじん「内務大臣」	二三五八	なか「中」	五二四四四六
ないぎ「内儀」	一三五一	ないむしゃう「内務省」	二三五八		
ないこう「内攻」	三三五一	ないめん「内面」	七三五八		
ないこう「内証」	一三五二	ないよう「内容」	五三五八		
ないこう「内港」	一三五二	ないらん「内乱」	三三五八		
ないざい「内在」	一三五二	ないりく「内陸」	二三五八		
ないしゅっけつ「内出血」	二三五二	ないるがわ「ナイル河」	一三五九		
ないじょ「内助」	一三五二	ないれ「名入れ」	一三五九		
ないしょく「内職」	二二三五二	ないろん「ナイロン」	六三五九		
ないしん「内心」	三三五三	なえ「苗」	一六〇三五九		
ないじん「内陣」	二八三三三	なえしろ「苗代」	一〇八三六三		
				計	一五六九四首

とも【名詞】〔続き〕

友にして時に師にして兄にしてまた上司なる君にひれ伏す⑧
 友に添ひ並びて侍る池の辺に櫂のめれ日つよく射したり(蒼坤)
 友に従きて歩きぬしわがまなかひにだしぬけに大き浅間山たつ③
 友に別れ今はひとりの道ばたに黍の穂垂れて雨は夜に入る
 友のあしのつめたかりきと旅の朝わかきわが師に心なくいひぬ①
 友の家朝を尋め来て森蔭に早春の松葉の香をかぎにけり①
 友の家に寝ざめうれしきこの朝け雄雄しきものか鶏の高啼き
 友の家に心沈めて寝て居れど戸の破れ多く北風さむけき
 友の家の朝戸開くれば庭の間ゆ平たく見えて最上川あり
 友の家を今日尋ね来て庭前の池の蛙の声ききにけり①
 友の遺稿読みて嗚咽をもらせども一人住ひの家にひびくのみ②
 友のいひしよき言葉われと共にあり雨つゆのごとく心うるほす
 友の歌読みつつあればむくつけき兵卒われのこころ澄みくる①
 ながらふる命はつひにあらなくに年少き友の死ぬには泣かゆ
 ながれ碧く瀾らに澄めり川上の友の村訪ふと心はずむも
 永わづらひ癒えて忘れて働けるわが十年を友病みぬきぬ②
 なきがらの友をかこめるいくたりの顔顔ちいくつものとしびと
 なる
 亡き友が去年よせにける年賀状畳まりてあり文箱の底に②
 亡き友が日毎にふみし石だんと思ひて上る大崎停車場①
 亡き友に捧げむが為朝まだき甕に清しき水汲みにけり

岡野直七郎 朝吹磯子 栗原潔子 依田秋圃 與謝野晶子 坂井菊枝 橋田東声 松倉米吉 桜井平喜 中井コツフ 遠野左田子 片山広子 岡野直七郎 土屋文明 佐佐木信綱 川島園子 森岡貞香 川島園子 四賀光子 高柳得宝

亡き友の思出しじに浮び来るけふはいかなる日にしあるらむ④
 なき友のかきし文みればうつそみのからだのにほひかくが如しも
 ②
 亡き友の歌集編む話われにして帰たりしが寂しかりつらむ③
 亡き友の新おくつきの荒土に霜ばしら立つみ冬きにけり⑥
 亡き友の血をわけしものの無くなりしことをおもひて墓に水かく
 ②
 亡き友の日記読まされ苦しきに笑顔顔ち来てよしと言ふ⑦
 亡き友を弔ひ堂の暗きより出てうつそみを夏日に照らす②
 亡き友をとぶらふ会に集りぬんよいよすこやかにあらむ八人
 亡き友を夢に見にけりこの家に來ざる歎きの通ひけむかも(庭菖)
 亡き歎き有りての歎き有る友のなげきは愁をいひ居る如し③
 亡き人を偲ぶと集ふ友らみな少女の顔に戻り語りつ②
 竹柏蘭の鉢を中にし語らふは十年を逢はぬ道の友なり①(秋の声)
 慰めむ言葉も知らに君が妻のわが友を見てただに泣かゆる④
 泣けとただ一語あたへて去りしわが友の少尉をはるかに思ふ①
 なつかしき歌のあるじのかの佐賀屋明るき灯籠を恐れける友①
 なつかしき友のおもかげ見出して羅漢屏風のまへにたたずむ①⑥
 夏すぎてまたきこゆなりまなびやに朝ゆく子らの友さそふこゑ①
 夏の陣樹蔭に据えし鹽風呂のおもひでいかにますらをの友①⑨
 夏の日のもなかにあり友の前に坐る畳の熱きを覚ゆ④
 夏の日暮れても暑し肌ぬぎつつもの言ふ朋の衰へにける④

矢沢孝子 白井大翼 竹尾忠吉 太田水穂 高田浪吉 松岡貞総 村野次郎 土屋文明 岡 麓 鈴木康文 遠野左田子 佐佐木信綱 矢沢孝子 森園天涙 森園天涙 吉井 勇 井上通泰 吉井 勇 島木赤彦 島木赤彦

- 夏の夜のいまだをぐらき尾根のへに友ときほひて山草を刈る③ 岡野直七郎
- 夏より秋へつづく便りや伝教大師賛歌交声曲を聞きし友より④ 土岐善磨
- 夏わらび汗を流して吾は食ふ友は告げぬ信濃も世間うるさしと 土屋文明
- 撫子の花にてありしこちしぬかの四五人の友と居しこと⑫ 與謝野晶子
- なにあすは明日の風が吹くさと、友を慰め、ついでに自分も慰めて見る① 後藤史郎
- 何か思ひ煩ふらしき若き友が今日は頻に子が欲しといふ 三国玲子
- 何くれと友のはとりの有難さ早く丈夫になりたきものを① 大熊長次郎
- なにげなき友の皮肉も或時はひねもす我を笑はしめざり① 萬造寺 齊
- 何事かよからぬ話もて来しやあらずと見る友のその眼を⑩ 窪田 空穂
- 何となく迫るおもひにもの言ひて転進の友と手を握りけり 米川 稔
- 何もかもすつばらかしてたつた一日遊びに來た友だかがやけ海③ 花岡謙二
- 何物を得ぬ身にしあれば友に持つわが先生は玉とひとしき⑬ 尾上 柴舟
- 何をかもいはんとしつわが友はさみしく笑めりわれを見つめて 窪田 空穂
- ⑥ 尾山 篤二郎
- なまけつただに日を消すこの日頃友の訃音をいただきて読みつ 川田 順
- ⑤ 涙もろきますらをなりし吾が友も国のためには厳しかるらし⑩ 四賀光子
- ならびある右も左もありし日のわが友ながら面がはりせる③ 太田 水穂
- 名を呼べば空に立ちくる面影のありと思へどもはるけしや友⑨ 與謝野 寛
- 名を忘れ「彼女」と云ひて清瀧に去年見し人を友の問ふかな⑬ 岡野直七郎
- 南方のわが友の四人、五人ゆきぬ距離の觀念全く無し⑤

- 匂ひ立つ二人の友と来て坐る青く短き篠も生ひたり② 斎藤喜博
- 似顔絵におのれをさぐる友の眼に映りしわれはかく描かれぬ⑤ 安田章生
- 握り飯腰にぶら下げ往きにけり足強ほこる山好きの友②④ 吉井 勇
- 肉体の痛みはたまらぬとつけて来ぬ孤独に克ちて痛み居る友が⑦ 四賀光子
- にくまれぬ顔せる魚どくどくの味をみな持つほめて売れ友② 川浪磐根
- 錦絵を抜けいでて来し友右衛門舞台にありて秋の雨降る⑭ 吉井 勇
- 西国の人の死にける電報を汽車にて発ちし友に打ち返す① 山口茂吉
- 西空の余光を望むことの如し幽世に入りし大いなる友 宇都野 研
- 西ドイツより交流の友を迎ふ部屋は疊の香り新し（明治神宮献詠） 角 孝蔵
- 西に東に友ら相つき病む二月長き交りの祈りは涙し② 渡辺信子
- 西の京祇園を思ひうつくしき小光を思ひうつつなき友④ 吉井 勇
- 西日さす窓の明るさにつつまれておもひつつをれば友ぞ恋しき⑬ 若山牧水
- 西山の老学生が友とし見る向つ和田山のあしたあしたの色⑩ 佐佐木 信綱
- 荷馬飼ふ土間より二階にのぼりたる友の家夢のごと幼くありき 高安国世
- （虚像の鳩） 吉田伊志子
- にはとこのしげれるかげに水ありて友らはすでに顔洗ひをり⑦ 高田浪吉
- 庭への藤の若葉をうちあふぎ朝くらき部屋にもの言ふ友は 斎藤茂吉
- にひ年にあたりて友がわがために白き餅をひそませ持ち来⑭ 大熊長次郎
- 庭に来て友にわかれを告げながら萱の秀つかむわがたよりなく① 尾山篤二郎
- 人間の一世の業の空しさを見よとも云はで友死ににけり⑧ 斎藤茂吉
- 人參を畑よりほりて直ぐに食ふ友をし見つつわれもうべなふ⑨ 前田夕暮
- ぬれし布つかむが如き心地しぬおもはぬ友の手を握りしに④

盗汗滲む友が臥着をほす間なし降りつぐ雨のいつやむべしや①

大熊 長次郎

白線の帽子かぶりし若き日を語りうる友また一人なし④

高橋 希人

白鳥に見入れる若き友の背よ昨日の夜恋を哭きし汝なり④

吉野 秀雄

白桃は友が郷里のおくりもの わが点心よ 孤貧にあらず⑦

土岐 善麿

旗を振り送り出したる我が友の還り来む日を何日とか待たむ①

都筑 省吾

旗を振る歓呼の中に友の顔ありしが今も目に浮び見ゆ

山田 公一

(支那事変戦地)

そば近く寄り来し友の何事か言ひたげなるを感じつつをり

稲村 かつゆき

(新万葉集一)

初雪の松のながめをくはしみと室を清めて友よびあそぶ

伊藤 左千夫

話すこともとぎれとぎれに新宿の雑踏をぬうて友とゆくかも

三村 ふさ子

(新万葉集八)

花に待つ友もとひ来ず久方の日にてらさえてくつろぎを居らむ

三浦 守治

花のころを病のまどにたれこめて旅なる友のふみをまつかな

金子 薫園

(片われ月)

花野原にわが明暮れて足らはざる思やあらむ友恋しきは

杉浦 翠子

花はめるゆとりもなきか玄間に愚をいふなる友も親しき(老師)

印田 巨鳥

はなやかに友はぶれ言を云ひさしてかへりぬもとの淋しき心⑤

尾上 柴舟

はなやげる銀座の宵の美しさわきて親しも並みゆく友は(美穂)

豊島 晃

華やける女優のごとき妻とあて友のゑがほの寂しかりけり⑧

金子 薫園

離り来て我が思ふ友大いなる顔にからだに笑みあふれ出づ③

都筑 省吾

はなさなば見失はむといましむる友が声きこゆ闇のうちより⑦

窪田 空穂

春はよしかの朝比奈の隈取も友の酔ひたる顔に似たれば⑭

吉井 勇

母に似し子は幸ありと母の友はじめての吾にのたまひにけり

中谷 ゆり

(新萬葉集六)

破片創身に負ひしかど束の間も友援けむと彈を射ちつぐ

廿桑 竹史

(支那事変戦地)

浜砂にためらはず傘をさし立てて碑に寄る農夫の友は②

田谷 鋭

早や青む畝の車前草つめたよと踏みつつ伝ふ友が後べを

北原 白秋

早や軒く友に隣し羽虫らの顔に当るも払ひつつ臥す

宮 柊二

腹一杯語り語りしと思ふを若き友ら如何に聞けるや胸をひらけよ

窪田 章一郎

②

腹抱へ笑ひし友の声音さへありありとして夜半に目をあく②

高安 国世

はらからに記憶ある思ひけふを我に母なる友の憂へ聞かする②

川島 園子

腹黒くずぶとくなれといふ友あり己が為し得ぬをひとにぞ強ふる

荒木 暢夫

①

バラックに蚤の多きをいきどほる友にならびて眠ることひも⑥

鹿兒島 壽藏

春風の吹く日とならば雨びも伊予路を行かむ友に逢ふべく⑥

花田 比露思

はるかなる南の島にゆく友にわれ言はむとす真心もちて

斎藤 茂吉

春来れば六年間の友だちと、もうすぐ別れた、アカシヤの木も

高橋 昌代

(兒童萬葉集)

春たつや北の雪野の冬ごもりさぞなとおもふ友の明暮⑤

太田 水穂

榛名潮の氷の裂くるひびきなど友聴きて来ぬ相行かで惜し⑬

與謝野 寛

春にがき貝多羅葉を名をききて堂の夕日に友の世泣きぬ(みだれ髪)

與謝野 晶子

春の朝新聞配る友の子の命おとせる現場みたりし

津端 亨

春の野に摘み集めたる簞の草かたかごもあり友とさげ持つ③

久保田 不二子

春の光盈ちあふれたる土手の斜面駈け下るなり友と犬と子供④

鈴木 杏村

春の宵さそひきにける友染の円肩人と車にありぬ(佐保姫) ⑤

與謝野 晶子

遙々とひ来し友と語らへば杜の松吹く風高まりぬ(冬空)

岡 麓

はるばると君をたづねて来たまひし友の幾たりにわれは告げ居り

斎藤 茂吉

⑩

遙々とたづねきたりしわが友とこの世に生きてひとたび会ひぬ②

神原 克重

晴れてゆく友の顔見ゆ論じゐて思ひあたれることやあるらし⑤

四賀 光子

晴れ間まつ山の温泉宿のすずしさに一人二人と寝し友のかほ②

吉植 庄亮

はれ渡る雲の空にうちむれて君が代よばふ友鶴のこゑ

堤 功長

(新年御歌会始)

日あたらぬ室の主婦のうれひ顔おくりし友もまた校を出づ①

富田 碎花

光堂戸を閉ざすらし夕ぐれてお山をくだるわれとわが友⑥

松村 英一

彼岸ちかき日といふにわが友はたちまちにして母を失ふ①

竹尾 忠吉

引揚の経験を持つわが友は黙して向ふ近づく島に⑦

宮 柊二

日くれたる島に友がかがみあつ赤きトマトの一つ手にあり

岩上 寿子

日暮まで歩き疲れて友と二人ときどきごちなく体のあたる

厨川 登久子

(新万葉集三)

ひさかたの空をひたして光る土を地図を出して友とたしかむ①

藤森 朋夫

久方の月に対ひてあれば吾が友のもだしまれる眼に泪見ゆ①

中沢 庭柯

久しきより南洋開発を事とせし友の志今日ぞたふとぶ⑩

川田 順

久に逢ふ友は子連れの母なるか幾とせ経ぬに世帯やつれて

津端 亨

久しぶり訪ひ来し友が裏庭の杏の花もちりにけるかも③

相馬 御風

久しぶりに逢ひたる友の声潜めためらひつついふその子が上を②

窪田 空穂

久しぶりに今日を我が来し講師室笑顔集めて友の数多ある①

窪田 空穂

久しぶりに来しわが友のふところにさやさと鳴る新しき風

高村 光太郎

久しぶり芋の畑に肥もちぬ友を送りて午後いとまあり②

藤原 東川

膝つきゐて修業僧は眼をそらさざり紅きつまかはの下駄友がぬぐ

栗原 潔子

④

久に逢ふ友も或は最後かと予感を持ちて今日を相見き②

桐田 蔭村

久に逢はぬ遠方の友は吾が髪の色を知らず妻持てといふ⑩

川田 順

久に友と逢へば互に歳をいひ共に顛頂のひかるをも言ふ

浅野 保

膝の上の猫を静かに撫でてゐる友に気安し黙つてゐても

清水 恒子

久々に逢ひし友よりいたはれつつ汪兆銘の声を聞きたり②

斎藤 茂吉

(のぼり巻)

久々に学校へ行けばわが友はみな美しき顔並べをり

清水 恒子

聖橋の影も梅雨どきは鮮やかに映りて友が別れを惜しむ②

川上 小夜子

肱をかぎり膝をかぎりの夏ごろも着ておほらかにわが友やある⑧

吉井 勇

ひそかなる旅のごとくにわれは来ぬ病みたる友を診むとおもひて

斎藤 茂吉

⑥

ひそひそと 声をひそめて語りあふ ひとりふたりの友ありしの

渡辺 順三

み⑤

ひたすらに禱禱らして集まれり六月七日五百まつりの友⑤

榊 富照子

ひたすらに友は織るなる織物に鶴の頭の朱が見えそめし①
ひたぶるに身のかなしみを言ひ出つつ遂に嫁ぎぬ幾たりの友は

(多磨四)

ひたむきなる友がいそしみをいまにいたり心に深くおもひいでつ

も(新万葉集三)

人こひし友こひし都こひしさびかなしといひつつ死ぬらむ①

人さにはありとは云へど群肝のこころの友は少なからずや

ひとしきり、騒いだあとで若い友、めいめい哀しい顔して帰った

①

ひとすちに捨身の道をいゆきたる友夢の華に来て物でんひにけり

③

一度は逢はむと云ひし友と逢ひ心くつろぎ長話せり①(美穂)

一年は過ぎにけるかな夜半行きて君いまさずと友と歎きし

人並の才に過ぎざる わが友の 深き不平もあはれなるかな①

人に逢ふこころ貧しも家ごもりやからを友と一日ありけり⑤

人に対ひたくましかりし友の行為ねたましきまでにいま胸を衝つ

(多磨二)

人の身に喜びあるは稀らなり友ありよろこび分つとぞいふ③

人の世に才秀でたるわが友の名の末かなし今日秋くれぬ(みだれ髪)

人の世の憂はいはず友も吾も語りつづくる古文献のこと(秋の声)

ひとむきに心つくして水漬かず生きつらぬきし友の手にぎる③

(現代短歌大系)

山下 陸奥

岩本 敏

貴田 実

田波 御白

伊藤 左千夫

後藤 史郎

斎藤 史

豊島 晃

柴生田 稔

石川 啄木

高田 浪吉

鈴木 杏村

窪田 空穂

與謝野 晶子

佐佐木 信綱

鹿兒島 壽藏

一夜明けてけふの日ぐれは友ら待つシャトルと思ふ雨ふる窓に②
人よりも石の羅漢を友としてあらばかよけむわれとこそ思へ⑩

一人ある子の母われは姉となり友ともなりて遊びやらむぞ②

ひとり来て戦友しのお夕ぐれの新戦場に初雪ふれし(支那事変戦地)

ひとりごち狐の申さくわが友の大虎小虎黙にあらんや(新萬葉集六)

ひとりして一生をとほす此友におもひはつきぬたのめしてあり⑩

ひとりねて独りさめたる曉はかけの鳴音も友とこそなれ

ひとり湯入れのむがをしやと歌書きて友恋しめり吾が曙覧の翁

火の上に葉を燻べてふかぶかと息づく友を見れば安らぐ②

日の昏^ぐがいたくつまれる舗道にて帰りを急ぐ友にこそあせず②

火のつきし煙草を墓に手向けつつ友を語る兵は泣きて居るらし

(支那事変戦後)

日端にて根岸の友に逢ひにけり蛙鳴くなる春の夕ぐれ①

暇のある友が言ひ出して思はざりし忙しき時にナイターを見る⑦

ひととけば畳のうへに栗の実の落ちこぼるるよ友の小包⑤

(現代短歌大系)

病室に今宵つどへる友四人血液型を話して更けぬ③

病床に友を思へばおとろへて瘦せたりといふ顔のうかばず⑦

病室に養ゆる心をいたはらむ今宵は友と映画館にゆく③

病床に春を過ぎむわがためと友が持ち来しさくら幾枝④

ひよひよと寒げに鳴きて友をよぶ鶉の声かも竹の葉ゆるる

昼暑き列車の中に上衣服脱ぎし夫を紹介す旧きわが友に②

中河 幹子

吉井 勇

浅野 豊子

野入 英樹

長谷川 如是閑

今井 邦子

柳田 国男

伊藤 嘉夫

鹿兒島 壽藏

平野 宣紀

四家 則雄

落合 直文

長谷川 銀作

太田 水穂

結城 哀草果

結城 哀草果

松村 英一

結城 哀草果

結城 哀草果

奥貫 信盈

林 圭子

浅野 豊子

午すぎに來たらむ友のいくたりを待つひとときに種蒔くわれは②	村田利明
貧乏のために永らく逢ひもせぬ友の丁戌をおもふ日曜⑤	西村陽吉
夫婦してすでに静けき墓石となれる友あり羨しきに似る③	山下陸奥
文さへやただにおこたりありへしを賀状よみつつ友をこほしむ②	藤川忠治
書の上みゆる昔の人ならで友こそなければもし火のもと	八田知紀
冬枯れの櫓の梢高々とこがらしわたるに友を偲びき①	坪野哲久
文中子は友に子弟に いにしへの聖となりて ものを言ひたり⑦	土岐善磨
兵となり満洲に行きたしと言ふ友よかつてマルクスを説きあかざりき①	近藤芳美
ベッドより日にはいる赤土と青草を歌へといひつ動かれぬ友に (角川文庫)	吉野秀雄
部屋ぬちのいたく冷える夕べまで校正刺を友と見て居り①	高田浪吉
部屋ぬちを壁り歩けるわが友の放つ異臭は誰も言はざりき②	川島園子
弁当を持たずに遠足に來しわれに寿司をくれ蜜柑をくれ友ら皆やさし	平中歳子
ボート漕ぐ若き友等のブラウスのとき色映ゆる碧き湖の上②	杉田鶴子
方角のなき感じにて雨ふれり旅遠く友の家にさむれば④	高安国世
防弾をせなに受けたる友の足をおもはず吾は抱きしめてゐつ	滝沢巍
朋輩のつつぐを如何にうらめしくいひなづける娘の思ふらむ①	森園天涙
ほがらかの顔をし若き友にむかふ氣おくれが吾にありやなしやに	高田浪吉
⑧ 北欧の空の澄みしを友は言ひバラ色の夢持ちたり今も③	村野次郎

ほしいままに今宵我あり旧き友と巷をゆきて焼鶴食ひぬ②	鹿兒島壽藏
ボタ山にけむりは白くたちのぼり酔ひたる友は蜜柑ばかり食ふ④	長谷川銀作
ほととぎす昨夜聞きつと電話きぬ円覚裏山にひそと住む友 (遠沙庵)	四賀光子
ほのかなる煙となりてわが友の空にのぼるを正目にぞ見し⑥	窪田空穂
亡びつつその背を曝せ大いなりと歎ける友の影曳く長城①	川浪磐根
前の世も後の世も師と友にある心地不思議と思ふこともなく②	渡辺信子
枕のみ友となしつ明しけり待ちつる人のよただ來なく⑤	樋口一葉
枕辺に一夜を語る友のこゑこの山の家に疲れてねむる① (はつゆきおこし)	高田浪吉
枕辺に寄りて余所着をかけてやれば友の命の汗の匂ひすも①	高田浪吉
まことけふ有馬温泉にをらしむる友とその子と吾と浸れる⑧	高田浪吉
まこともてまじらふ友はなかなかにはからよりもしたしまれけり①	昭憲皇太后
まことわれうつそみなれば友どちとつどひ語らくたのしかりけり (現代短歌大系)	加藤東籬
正忠を恋の猛者とぞ友の云ふ戒むることそそのかすこと⑦	與謝野晶子
まざまざと言葉たくみに名利へとゆく幾人の友を送れり①	桐田蔭村
まじはれる友等が学ぶ大学をこころ羨みき思ひみるだに⑦	松村英一
猿なく声かあらぬか幾まがり先ゆく友が呼ばふ山彦か①	岡山巖
貧しき国に貧しき民ありていよいよ貧し吾もわが友も⑩	松村英一
ますらをのすゑのまな児をさきだてていかにあらむあはれわが友②	橋田東声

また逢はむ逢はざらめやも玉きはる命一生のまことなる友⑩
 たまあへる友をこそまてうき事のあらむかぎり語り尽くさむ
 またかと友のねてゐる室に入り電灯をひねれば枕もとのながみ
 に赤い血③

太田 水穂
 三浦 守治
 花岡 謙二

また今日も少女を猥ると来りしや恋のさつをのわかうどの友①

吉井 勇

また来るといひて立ちゆく旧き友帰り際にいふ生きてゐるよと③

大岡 博

またしても筑紫の友よ語ること半ならぬに別るべきかな⑬

與謝野 寛

待ちまけてありけむ友がつぎつぎに言ひつくを吾はききつつ歩む

③

栗原 潔子

燐寸すりて煙草にうつす友の顔夜闇にしばし現はれて消つ①

荒木 暢夫

松風のしらべを千代の友としてたづこそあそべ池のなぎさに

大原 重明

(新年御歌会始)

松風よ不断に吹きてわれここに住まむ日までの君が友たれ②

藤田 とみ子

松にふくしほ風さむみ住吉のうらみてもなく友千鳥かな④

樋口 一葉

松葉杖つきたる友と歩みいて足早くなるわれをかなしむ⑥

小林 利弘

(朝日短歌二)

待つ久し来りし友とあるきたり月青む夜の池をめぐりて

津端 亨

まづわれにうま酒の樽を送り来て酔へよとぞ言ふ土佐の友かな⑬

吉井 勇

窓により春の山なみうち見ては悲しいひし友逝きにけり

北原 放二

まなかひの瑞枝の若葉透きとほり清しき友とけふは迎へつ④

矢沢 孝子

道づれの友をしたしみかたらへば同じ都の人にぞありける①

昭憲皇太后

みちのくに吉備に筑紫にちりぢりに別れし友は恋ひて思はむ③

島木 赤彦

陸奥に友は死につつままたたきのひまもとどまらぬ日の光かなや③
 みちのくのわが友ひとり山に入りきのこ狩りせし後の話す⑩
 道の師友と四年振りなる逢ひをして比叡の二日を劃期となさん②
 みちばたに友食ひをしてゐる昆虫の黄色の翅はふるへつつあり①
 導きし友の二人とたづさはり鶉めづらしむ寒きゆふべに⑧
 みどり児の笑へばわれも笑ふなり友を悼むと遠く来りて①
 身に沁みて友の話を聞くまににいよいよ親しこの古き友④
 身に近き友のたれかれを思ひみつ寂しからぬなし人の生きざま
 身に近く弾丸は落つれど当る弾丸少きことを友とささやく⑤
 見ぬ国をあくがるがに征でゆきし友いくたりかわれより若し

(支那事實続後)

斎藤 茂吉
 斎藤 茂吉
 渡辺 信子
 前川 佐美雄
 斎藤 茂吉
 小名木 綱夫
 高橋 希人
 若山 牧水
 田畑 善兵衛
 生咲 義郎

見はるかす鞆鞆の空いや遠き島辺に友は父をなげくや⑥

吉井 勇

三人子の母なる妻君うち目守り友にし泣ける涙新たなり②

川島 園子

見舞ひこし友にこたへて胆と胆すこやかにして相逢はましと①

井出 一太郎

耳近くささやく友の声ありてきき度きことに触りてつげをり⑤

長沢 美津

みやげ選る友の心のさだまらぬうしろにありて旅をさびしむ②

中川 與一

都にもよき友ありと一人子をきづかひまさば母につけてよ①

相馬 御風

都べの友らあつめし路用なりつかひすつべき金にあらぬなり②

臼井 大翼

都べの友らを妬む心すらいつかうすれて年ごろは経つ②

上田 英夫

都辺は風あらあらしわが友よ酒は酌むとも深酔なせそ⑩

吉井 勇

都より来りし友とおまつりの祝ぎ酒を共にくみにけるかも①③

相馬 御風

都よりよき友ひとり来りたり春のまつりの夕ぐれのかたに②

相馬 御風

みやびたることばをかくる声なり友なしとおもふ旅のやどりに

昭憲皇太后

○

見ゆ聞ゆ極を土のうつ音もかたはらに泣く友の姿も①

森園天涙

妙高の山の中処に友はゐる雲の歌つくる石の歌つくる②

吉井勇

見よ今朝はほがらかに晴れしと勢ふ友に誘はれ起きて外に出づ①

大橋松平

見よ誠忠一途の心おのづからほとばしりをらずや有朋の書は①

竹添履信

見るかぎり友の顔みな死にはてしきなきに独りものをおも

若山牧水

ふ③

見るからにすべて杉山茂るなり友がなりはひのここの山峽⑧

高田浪吉

民芸の鹿の張子は次々と友の手先より生れてたのし(毎日歌壇)

上田多圭野

むかしの友いきのこれるがここに逢ふおもひしよりも面かはりせ

中沢庭柯

ず②

麦畑を馳せゆく友が仕事着の白くひるがへりたのもしきかも③

山下陸奥

向島にいまは隠れて住む友もいづれは華奢のはてにやはあらぬ⑬

吉井勇

むごたらしく一家全滅したる友の藻谷六郎もこの街に住みき⑤

渡辺順三

虫の音の澄みとほる夜を友と居て語る言葉はおほかた寂し

松岡幸子

(新萬葉集七)

陸奥にあそびに来よと友はいふ声を聞くだに幾年ぶりぞ①

窪田章一郎

胸と胸とおもひことなる松のかぜ友の頬を吹きぬ我頬を吹きぬ

與謝野晶子

(みだれ髪)

むらさきの花に勝りぬ園にして池の映せるわが友の影①

高橋英子

むらだてる赤き岩々飛びこえて走せ寄る友に先づ胸せまる

若山牧水

明治大正の御代のことども後の世につたへなむ歌集「国民同朋和歌集」①

三井甲之

命ぜられて遺書を書きたる記憶すら友とありつたのしかりき①

近藤芳美

めうとにて深くも契あることをさきはひながら友を祝はな⑥

高田浪吉

めぐりあひて泣きみ笑ひみかたらふは幼あそびの友にやあるらむ

明治天皇

○

眼凝らして待ちまてる友は霧の中の岩壁のうへに影あらはしぬ⑤

半田良平

召されたる友いくたりか出で立ちて言の静かに行方を告げず⑨

松村英一

召されたる友は輕機銃班上等兵いづくにありてけふを戦ふ

生咲義郎

(支那事変銃後・巻節)

珍らしき大き鮒ありまっさきに友かたじけな我にすすむる④

鈴木康文

目に立ちて衰へしるき友をまもりかなしさに堪へてものをいひつ

平福百穂

る①

眼にのこる彼の野はとほく吾が友の死にゆく影がいま行けるかも

中村憲吉

①

目のまえの青菜ついばむと友鶏のあまた踏みこえぬ一羽の雛は

宇都野研

目鼻なき友だちの顔のしたしもよ光の中に笑ひつつ見ゆ③

吉植庄亮

目や耳や老のぐちごと語り合ふすがはあらずよみなる友に②

矢部道氣

ものの音ことごとく銃音と鼓膜うつ今宵友焼く火を守り更けぬ

門井真

(支那事変戦地)

焼跡に友のむくろを掘りあてしときの話聞けば思ほゆ

山本明

(新萬葉集九)

靖国の宮の広前に友われ等ぬかづきぞ禱ぐ武運あらせたまへ①
安房の海べに七十七才の友ありて久しく会はぬわれを待つといふ

伊藤嘉夫
鹿兒島 やすほ

②
やすみ日をゆくりなく来て友が墓の萩のさかりにあへりけるかも

金子信三郎

③
瘠す瘠すも生けらばあらむを何故ぞゆくべからざる友逝きつづく

尾上柴舟

④
安らかに今日はあるべしわが友らわれをかこみて飛鳥路をゆく⑤
安らかにねむれる友は顔にさす月の光は知らざりにけむ

松村英一

(新万葉集三)
屋根うらの部屋かりて生活立てたしと言ふ友と来つ日のさせる橋

子田重次

(玻璃)
藪かげにひそやかに咲く二人静名に負へる菓子友より届く②
藪ふかく窓のもとよりうちつづく友が二階の二月の月の夜④
山雨のすぎゆく原真弓にしづまりて木ぐさもわれも友もぬれをり

真鍋美恵子

④
病あつく臥れる友と会ひがたくまた白き塀に添ひて歩み出づ②
病家より二町程来しアダンの蔭に友郵便受はおかれてありぬ

佐伯敏子

④
山雨のすぎゆく原真弓にしづまりて木ぐさもわれも友もぬれをり

若山牧水

④
病あつく臥れる友と会ひがたくまた白き塀に添ひて歩み出づ②
病家より二町程来しアダンの蔭に友郵便受はおかれてありぬ

生方たつゑ

④
病あつく臥れる友と会ひがたくまた白き塀に添ひて歩み出づ②
病家より二町程来しアダンの蔭に友郵便受はおかれてありぬ

堀内通孝

(新萬葉集四)
病おもき友を見舞のかへりにて昔住みたる町に下り立つ③
山いくへ離れてすめど寂しさはまのあたりなり遠き友らよ④
山かぜのつぎて吹きくる高原の秋草しきて友と語れり④

城山達朗

④
病おもき友を見舞のかへりにて昔住みたる町に下り立つ③
山いくへ離れてすめど寂しさはまのあたりなり遠き友らよ④
山かぜのつぎて吹きくる高原の秋草しきて友と語れり④

土屋文明

④
病おもき友を見舞のかへりにて昔住みたる町に下り立つ③
山いくへ離れてすめど寂しさはまのあたりなり遠き友らよ④
山かぜのつぎて吹きくる高原の秋草しきて友と語れり④

太田水穂

④
病おもき友を見舞のかへりにて昔住みたる町に下り立つ③
山いくへ離れてすめど寂しさはまのあたりなり遠き友らよ④
山かぜのつぎて吹きくる高原の秋草しきて友と語れり④

今井邦子

山川の清きたぎちに宮居して友の弥は味女の尊⑦

松田常憲

山川にただにむかへる友の家の二階に居りていとまありたり④

太田水穂

山草をあつめし友のなきあとに妻と争ひし我がことを聞く

土屋文明

山国の好の片里に住みつきて友ががり帰る夜空虹立つ(冬空)

岡 麓

山路にて出合ひがしらにものを言ふ村人は吾が幼な友だち

藤沢古実

やまとのくににまこころ尽さむといそしむ友ら歌にてかたらふ

三井甲之

山どりを係蹄に捕らしめ石川に小鱒とらしむ我が友のために③

中村憲吉

山中にわれより若くひとり住む友のまなこのすずしかりけり③

岡野直七郎

山に寝て傍らの友やと呼びぬよき歌あるか夢のなかにも⑬

與謝野寛

山にのぼりまことをはなちおもふことかたればたぬし友と二人して⑤

三井甲之

山の井の清き真水を風呂にたててわれは待ちをり遠来る友を①

金子信三郎

山の上の光は明し湯あみある友のからだを思ひ見る我は

島木赤彦

山の上強羅の花を友の去り三人となりて日の長きかな①

近江満子

山の上のお花畑に友どちと天わたり行く白雲を見し

藤沢古実

山の上の光は明し湯あみある友のからだを思ひ見る我は④

島木赤彦

山の端の松やむかしの友ならむはなれかねても見ゆる月かな①

八田知紀

山の宿の洋灯の笠にひびありて友が寝返りのたびにひびきぬ②

山下陸奥

山踏みし疲れを持ちて国遠き信濃の友の墓をとぶらふ①

森山汀川

山道におくれがちなるをいたはりてわがうしろより友あゆむはや

斎藤茂吉

⑨

山路に木の根岩角踏みなづむわれを助けて友ら添ひたり④

奥貫信盈